2023年7月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第558号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

ひとり出版社　出版メディアパルの21年間

小出版の夢と冒険「本の未来を考える旅」

文・下村昭夫（出版メディアパル代表）

2003年の4月23日。「サン・ジョルディの日」に合わせて、2冊のブックレットを発行することで、「ひとり出版社　出版メディアパル」は生ぶ声をあげました。それから、21年もの歳月が流れたにもかかわらず、私は、そのとき感じた、「問題意識と課題」を抱えたまま歳を重ねたことになる。

たくさんの夢に出会い、そして著者と巡り合い、44点の「本の未来を考える出版メディアパルシリーズ」と50点の出版関連実務書を世に送り出すことが出来ました。

ひとり出版社「出版メディアパル」の船出

2002年11月29日で「定年退職」となり、「出版技術講座」（主催：出版労連）の「さようなら講演　本と編集者の世界」を新しい出発の日と定め、1961年10月2日から41年2ヵ月間にわたり勤めたオーム社から旅立ちました。退職と同時に、出版メディアパルを設立し、「出版への夢をはぐくむ」準備を始めた。退職して4ヵ月後の2003年4月1日には、出版活動の本格的な稼働を始め、「本の未来を考える旅」に船出した。

一人で、出版社を始めるために、いろいろな準備が必要であった。編集者歴42年といっても、企業運営の経験は皆無である。「72歳まで10年間で50点発行できればよい」という、やや時限会社的位置づけなので、あえて「個人会社」のままでスタートした。個人会社では、社会的信頼度がないのが欠点といえるが、どこにも登録の必要もなく、株主を募る必要性もなく、誰にも迷惑をかけずにスタートできる気楽さがあった。

定年後の「やや道楽的」会社である。50点の「本の旅」を楽しむために、戒めにしたことが二つある。一つは、「家計費を持ち出さないこと」であり、二つ目は、「借金をしないこと」である。

現在の出版界の現状では、配本してから、資金回収は7ヵ月後ということになる。仮に、退職金1000万円を投資したとしても、5冊も本を出せば、小さな資金はあっという間になくなってしまう。幸いなことに、日本エディタースクールからの講師依頼や『毎日新聞』メディア欄の連載、『新文化』紙の連載などがあり、初期活動には、十分な資金調達が可能となり、自己資金ゼロの出版メディアパルは、2003年4月に順調に滑り出した。

出版物を出版流通ルートにのせるためには、まずは、日本図書コード管理センターから、「出版者記号」を取得しなければならない。10年計画で50点という出版計画を明示し、6桁の出版者記号「902251」を取得した。登録料金は出版社記号の桁数によって異なる。次に、書籍JANコード（バーコード）の利用も申請し、この手数料は、売上げ規模によって5段階に分かれているが、Eランク（売上げ規模1億円以下）で申請、3年間の貸与料金1万円を支払った（その貸与期間が切れ、数回、更新手続きを執った）。

取次口座の開設と資金管理

最大の難関は、取次口座の開設である。現在の出版流通の現状では、取次（販売会社）との新規取引の開始には、大きな壁がある。仮に、大手の取次と新規取引の口座が開設出来たとしても、小規模出版社の取引条件は、極めて悪いのが常識である。

ある大手取次の「新規取引申請書」が手元にある。「仕入正味65掛」「委託販売」「7ヵ月後の精算」「35%返品保留」「5%の歩戻し」などとなる。これでは、7ヵ月後に代金が入ってきたとしても、返品率40%と想定して、定価換算で50%（ほとんど製作原価に近い）の資金回収がやっとということになり、手持ち資金が豊富でない限り、少部数の専門書の発行には無理がある。

出版メディアパルの場合には、幸運なことに地方・小出版流通センターのお世話になることができた。地方・小出版流通センターの取引条件には、大きな壁がない。「自費出版でなく、年間4冊程度の出版計画をもっていること」「出資金6万円を準備すること」の二つであった。

地方・小出版流通センターは、注文制を前提にしており、取引条件は小部数ながら安定しており、返品率は大手取次に比べ、極めて低いのが特徴である。

注文品は2ヵ月後の精算、委託品は7ヵ月後の精算、常備は1年後の精算ということになる。直接取引の書店のほかに、トーハン、日販などの大手取次帖合の50社ほどの書店に送本（配本）していただいている。

ＴＲＣ（図書館流通センター）の役割も大きい。地方・小出版流通センターを通しての取引になるが、30週間の見本展示をしていただけ、多いときには120冊、少ないときでも40冊程度の販売実績となる。販売率の実績は、よいときには90%以上、平均で70%以上を維持している。

次に必要になったのが、読者への通信販売による代金回収のための郵便口座の開設であった。この口座は、地方・小出版流通センターからの売上代金の振込みにも使用している。

同様に、専用の銀行口座も開設する必要があったが、銀行口座は、おもに印刷代金や印税などの支払金の振込みや宅配便の引き落としに利用している。この郵便口座と銀行口座に製作費用が貯蓄されたときが、次の書籍の発行時期になる。

新企画の依頼も、年間の資金調達との整合性を持たせなければならない。いつも綱渡り的な発行になるが、21年間、何とか維持できている。地方・小出版流通センターからの注文品と委託品の販売代金の支払予定が明確なので、この点は計画が立てやすい。

怠りがちな帳簿記入とインボイス制度の導入

大切なことで、怠りがちなのが費用の帳簿付けである。2023年10月からは、経理業務は、「インボイス制度の導入」、「改正電子帳簿保存法の施行」により、請求書のデジタル化が求められ、転換期を迎えることになる。

領収書の管理、支払書の管理、あるいは、収入金の管理などを漏れなく記帳するのが大変である。これを怠ると、税務署への申告書の記入に相当な時間を要することになるが、今では、Excelを駆使して、個々の経費を記入していけば、自動的に決算書が出来上がるようになった。Excelの活用には、在庫管理のための「受払表」がある。90点に膨れ上がった1万部に及ぶ在庫が一目瞭然に把握でき、重版などの準備に役立てている。

頭を悩ます返品・在庫問題と経営実態

厄介なのが、返品である。地方・小出版流通センターの取引は注文制が原則とはいえ、様々な理由で、一定程度の返品が生じる。やっと、注文品の販売額が10万円になったと喜んでいると、段ボール一杯の返品を受領する月が年に4回ほどある。今でも、その返品金額が注文品の販売額を上回ることがある。その月は「赤伝」となり、翌月の販売額から差し引かれるが、年間を通じ計画的に発行しないと、「赤伝」が発生する恐れがある。

返品が資金繰りの悪化につながることもさることながら、返品本の汚れや破損状態を見ると、労働意欲がそがれることになる。片付け作業が後回しになり、ついつい倉庫の片隅に積んでおくことになる。出荷していない、手持ち在庫の増大が大問題である。現在では、常に、1万部程度もの在庫を抱えることになる。

倉庫にしているのは、自宅に隣接した築50年の木造アパートの1階である。総在庫の重量は、400キログラムを超え、限界に近づいているに違いない。現在、2階は、出版メディアパルの編集室になっている。友人たちには、「出版メディアパルが倒産する前に、倉庫の床が抜けるに違いない」と冗談を言っているが、それが、あながち「冗談でなくなってきている」現実がある。

さて、経営実態は、3年前までは「書籍売上げ」を中心に新刊書4点の本の発行を含む総費用が維持してきたが、コロナ禍で資金繰りが悪化し、厳しい状況が続いている。人件費は出せないが、そこは、年金生活者の強み、私の給料が、年中無休で、加えて「無給」なのと自宅で仕事しているため事務所費用などが発生せず、「かろうじて、経営を維持」できている。発足当時の借入資本金は、毎年、繰り延べ決算している。

地方・小出版流通センターからの金額返品率を計算すると、18%程度ということになる。出版業界の平均返品率が38%程度と異常状態の中では、健闘しているといえるが、もともとの送品部数は極めて小部数で、企業としての採算性は悪い。平均発行部数は1000部であるが、700部を採算点としている。実売部数が1000部を超える実績の本は10点しかない。好調な書籍は、内容を改め、改訂版を発行することになる。

販売力の向上が課題

当然、販売力の向上が課題となる。編集生活は61年になり、本を作ることが生活の一部になっているが、本を売る知恵は、あまりない。

書店促進も苦手である。書店での販売促進を業とする営業のプロに、書店促進をお願いしてきた。2017年以降は、『出版営業ハンドブック〈実践編〉』の改訂を機に、文字どおり、その内容を実践していただくために出版企画研究所の岡部一郎さんに販売促進を依頼している。お二方のご努力で、少しずつ出版メディアパルとしての営業活動が実りつつあったが、2020年以降は、諸般の事情で、その体制が崩れている。

『出版営業ハンドブック〈実践編〉』税込価格1650円・ISBN978-4-902251-30-2

出版メディアパルのＷｅｂを通しての読者からの直接注文やセミナーなどでの直販も堅実に伸びている。『新文化』紙への書籍広告の出稿など、小さな努力を積み重ねているが、なかなか実績に結びつかない。もちろん、販売のプロからみれば、何の販売努力もしていないのと同じなのかもしれない。出版社を続けてゆくには、販売力の強化は不可欠であるが、足が出ないのが、実情である。

国際交流と広がる人の輪

2006年6月には、『韓国の出版事情』を発行したことを契機に、韓国・中国・日本の三ヶ国の出版学会の交流の場である「国際出版フォーラム」にたびたび出席するようになり、国際交流の輪が広がった。

本格的な国際出版交流は、翻訳者館野皙さんのご尽力で生まれた李斗瑛先生の『韓国出版発展史』を日韓同時発売したことが最初で、20周年記念企画として、2021年3月に金彦鎬さんの『カラー版世界書店紀行』を、2022年5月には、韓国出版学会出版政策研究会編著の『韓国出版産業の現状と変化』を発行した。

『韓国出版産業の現状と変化』税込価格2640円・ISBN978-4-902251-41-9

国際交流もまた、「夢の一つ」である。

言葉の壁を越え、出版学を学ぶということで、東アジアの出版人が手を取り合っている。その成果は小さな歩みかもしれないが、確実に「本の未来」へと続いていると確信している。

出版教育とテキストづくり

私が「編集」について学び始めるきっかけになったのは、1981年に始まった出版労連主催の「出版技術講座」の運営責任者になったことが、そのルーツである。

当初、6講座程度で始めた講座は、やがて10講座に拡張され、現在も続いている「本の学校（夜間講座）」である。生まれたばかりの講座は、「教材はない、教室がない、お金もない」３Ｋ状態のゼロからの出発であったが、「ニューメディア・技術革新時代」を迎え、技術教育が強く求められていた。その課題に出版現場の第一線で働く先輩編集者が、自らの知識や技能を惜しげもなく、提供してくれた。

私は、その講義レジメを整え、いつの日にか、「出版技術講座の自前のテキストを作りたい」という思いを秘めていた。20年もの時が流れ、その講義レジメの積み重なりが「本」という形に結実したのが、『本づくりこれだけは』である。この本は、私の著作というより、「出版技術講座」でお話を聞いた講師の方々の「本づくりの心と技」が結実した本でもある。改訂4版まで、版を重ねたが、現在は、4人の共著として『新版　本づくりこれだけは』と書名を改め、内容を一新と好評を得ている。その後、テキストは、好評の『校正のレッスン』や『編集デザイン入門』『編集者のためのInDesign入門』などとラインアップが豊富になった。

『新版 本づくりこれだけは』税込価格1650円・ISBN978-4-902251-37-1

『校正のレッスン』税込価格1760円・ISBN978-4-902251-32-6

『編集デザイン入門』税込価格2200円・ISBN978-4-902251-29-6

もう少しだけ、「本の旅」を続けたい！

本の未来を考える旅を始めて21年になる。この21年間に見つめてきた「出版の近未来像」は、決して、明るいものではない。しかし、私は、決して、失望はしていない。どんなメディアも、永久に不変であると言えないが「本は不滅である」と、私は信じている。

電子書籍時代とは、「紙以外の電子メディアを通じて、人の意思を伝達する時代である」と言える。紙メディアを使うにせよ、電子メディアを使うにせよ、それは同時代をともに生きる人々の「心と心」を結びつけ合う媒体の一つを選択することに他ならない。

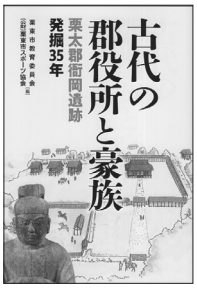
私の見てきた、「出版の未来像」は決して明るいものではなかったが、本の旅は、「楽しい旅」であった。それは、多くの著者との新たな出会いであり、「本づくり」を支えてくれた協力会社の人々の技術と心に支えられてきたことに他ならない。その信ずる道をもう少し先まで歩いてみたい。

（しもむら　てるお／出版メディアパル代表）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『古代の郡役所と豪族 －栗太郡衙岡遺跡発掘３５年』●栗東市教育委員会 編



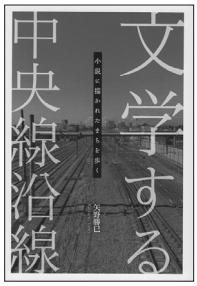
本書は、栗太郡衙岡遺跡発掘35年を記念に開催されたシンポジウムの記録である。古代国家の行政組織は国郡制。近江国は12郡に編成され、その一つが栗太郡。現在の滋賀県南部（栗東市・草津市・守山市・大津市）あたりである。西隣の瀬田川近辺には近江国衙がある。国府（国庁）が基壇と礎石そして瓦葺の屋根を持つのに対し、郡衙（郡庁）は掘立柱建物に板葺屋根だったのが特徴である。

岡遺跡においても同様に大きな方形の柱列の跡が多数見つかった。８世紀前半から中頃ぐらいと考えられている。庇付きの正殿の周囲を一棟約５０メートルの長舎が「回」の字のように取り囲む。南側の建物は三つに分かれ、真中の建物は国や郡の役所に設けられる格式の高い八脚門だった。その他、正倉（倉庫群）なども多数見つかっている。長い舌状の丘陵の先端部に位置する栗太郡衙の後背には式内社小槻大社が鎮座する。周囲には4世紀から5世紀の古墳群があり、郡衙近くの地山古墳の被葬者は小槻山君だとされる。小槻大社の祭神・於知別命（落別命）を祖と仰ぐ小槻氏だが、物部・勾・建部など郡内の各郷には複数の豪族（氏族）が存在した。

その中で小槻氏が勢力を強めていったのは山の資源などの生産部門を獲得したことに起因する。郡司の任命は特定の有力氏族に固定化してなかったという。それが郡衙＝掘立柱建物だった理由とも。一方で譜第・重大の家柄から選び嫡流に継続させるなど現代日本に通底することも。（Ｉ）

◆ 2000円・四六判・160頁・**サンライズ出版**・滋賀・202303刊・ISBN9784883257911

『文学する中央線沿線 －小説に描かれたまちを歩く』●矢野勝巳 著



東京から西へ延びる中央線。沿線には中野・荻窪・吉祥寺・立川・八王子などの街が並びます。そこは同時に太宰治・小島信夫・篠田節子など多くの作家が住んでいた(いる)街でもあり、多くの文学作品の舞台に選ばれた街でもありました。

本書は中央線沿線が舞台の文学作品を紹介するとともに、その舞台となった街についても解説してくれます。取り上げる作品も太宰治『斜陽』から又吉直樹『劇場』までと時代的にも幅広く、読書好きなら何作かは読んだことがあるのではないでしょうか。井伏鱒二『荻窪風土記』では、多くの作家仲間のいた荻窪や高円寺・阿佐ヶ谷などの街が描かれています。中央線沿線に移り住んだ作家たちの交流も描かれますが、広々とした畑地が広がりながらも地価が一年で倍になったと言われるように、武蔵野台地の田舎であった荻窪周辺が開発されていく様子もうかがえます。野川周辺の風景を細かく書き込んだ大岡昇平『武蔵野夫人』も取り上げられています。大岡が幼年期を過ごした渋谷にも湧水や小河川があり、著者は大岡の文学の原点をそこに見出しています。中央線沿線の台地上の新開地と、坂の下には甲州街道沿いの古くからの街並みという性格の違う二つの顔を持つ国立の街も興味深いですね。街に繰り出し、作品世界を追体験するもよし。どんな風に描かれているのかと、まず紹介されている作品を手に取るもよし。読書と散歩がさらに捗ること間違いなしの一冊です。（副隊長）

◆ 1700円・四六判・221頁・**ぶんしん出版**・東京・202305刊・ISBN9784893902009

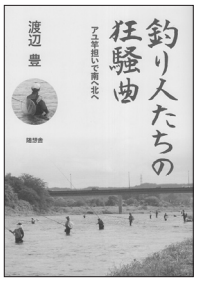
『日台万華鏡 －台湾と日本のあいだで考えた』●栖来ひかり 著

新型コロナウイルスが猛威を振るった中、早くから徹底した水際対策と情報共有で感染拡大を押さえ込んだ台湾の政策は記憶に新しい。こうして先手を打てた背景には以前流行したSARSで人命を失った悪夢を繰り返したくないという教訓がある。また、東日本大震災時には台湾から多額の義援金が集まり、多くの人がボランティア活動に訪れた。日本人の台湾に対する好感度は上がり、旅行者は増え、台湾グルメも人気を博している。

本書は2006年から台湾で暮らす日本人の著者が、日本と台湾の”あいだ”で物事を見つめたエッセー集。「社会」「ジェンダー」「日台文化比較」「歴史交錯」「映画・アート・本」といった切り口で硬軟織り交ぜながら内なる多様性を気づかせてくれる。「BRUTUS」台湾特集の表紙に台湾人が不満を感じた理由、という興味をそそられるタイトルから始まり、日本統治下における台湾の日本人妻の歴史から必死の活動を経て整えられていった居留問題、今ある自由や民主、人権は多くの犠牲の上に獲得されたというメッセージを発する台湾ホラー映画、無名だったが、日本でもようやく再評価され始めた日本に引き揚げてきた湾生画家立石鐵臣や人気グルメ小籠包など、まさに万華鏡の如くテーマは多彩である。例えばジェンダー問題など、固定観念に縛られがちな日本の現代社会が抱えている問題も台湾に照らせばより明瞭になることは多い。著者ならではの視点で愛すべき台湾を見せてくれる33編。（Y）

◆ 1600円・四六判・255頁・**書肆侃侃房**・福岡・202305刊・ISBN9784863855724

『釣り人たちの狂騒曲 －アユ竿担いで南へ北へ』●渡辺豊 著

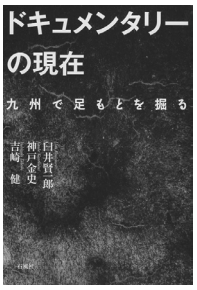


アユは日本各地に生息する代表的な川魚だ。石に着く苔を食み、生まれた川に特有の匂いを身にまとう。万葉の時代から詩歌に詠まれてきた。春に下流で生まれ初夏に遡上を始め、夏に中上流域で大きく育つ。秋に川を下って産卵すると、子供らの旅立ちを見ることなく、一世代一年の儚くも勇壮な旅を終える。成魚はなわばりを持つ。ハリを抱かせたおとりアユを闖入させ、追い払おうとする野アユを引っ掛けるのがアユの友釣りだ。江戸時代発祥の釣りで趣が深くファンが多い。アユ釣りの好期は6月から9月と短い。そのせいかある種のアユ釣り師は、寝ても覚めても一年中アユに恋い焦がれるようになる。

本書は、まさに骨までアユ釣り一色に染まった会社員釣り師の、身辺雑記風エッセイ集だ。眠れない釣りの前夜はヒツジの代わりにアユを数える。釣り竿の講釈、仕掛け作り、おとりアユの選び方から川の好み、料理法など、語りたいことは次々あふれて、ついに一冊の本を書くに至った。「釣り師には、定年もリストラもありません」（145頁）「生涯　ヒラ！」（248頁）仕事に誇りは持つが会社での椅子取りゲームには興味なし。上司よりお小遣いをくれる奥様のご機嫌の方がよほど重要。極端な人物の極端な文章は楽しい。人生はただアユ釣りのためにある、らしい。「部長席などというものは立派ななわばり」（183頁）「国家などというものもなわばりの一種」（186頁）アユ釣り師ならではの名言だ。（堀内正徳　フライの雑誌社）

◆ 1200円・A5判・250頁・**随想舎**・栃木・202304刊・ISBN9784887484207

『ドキュメンタリーの現在 ー九州で足もとを掘る』●臼井 賢一郎・神戸 金史・吉崎 健 著



九州に軸足を置く３人のジャーナリスト。ドキュメンタリーこそがテレビジャーナリズムの努力の帰結、核心であり、ローカルだからできることがあるとの信念で取り組んでいる。九州朝日放送プロデューサーは、福岡を訪問した韓国人元慰安婦への取材をきっかけに、何度も韓国に足を運び、チゲ鍋を共にするほどの信頼を得る。RKB毎日放送記者は、東京報道部に単身赴任し、やまゆり園事件の容疑者に、障害児を持つ親であることをさらけ出して対峙する。NHK福岡放送局ディレクターは、30年にわたって水俣病を追い、患者の唸り声や身振りから心の会話ができるようになる。３人はほかにも、普賢岳災害、福岡県警白紙調書事件、福岡出身の中村哲医師、諫早湾干拓などをテーマに苦闘してきた。どんな思いで事件に接し、人と向き合ったのか。ドキュメンタリーにかけた覚悟を記し、後に続くことを期待する入社２年目から４年目の若い記者、ディレクターと座談会をもつ。

ドキュメンタリーは、時代背景や社会情勢の認識と理解、人間関係の構築と信頼性の醸成、対話する力、鋭敏な感性と綿密な取材力、言葉の推敲、ち密な構成力あってのものであると熱く語りかけ、若手からは、ネタとして取材相手に接するのではなく、人として接するのだと返ってくる。報道の自己規制や衰退がいわれる今日、手間暇かけてドキュメンタリーを作り続けることが、報道の可能性を高めるのだと確信させられる。（飯澤文夫）

◆ 2000円・四六判・376頁・**石風社**・福岡・202304刊・ISBN9784883443178

『会津のむかしばなし５　会津地方』●前田智子 / 菊地悦子 / 鶴賀イチ 著

シリーズとして刊行されてきた「会津のむかしばなし」の第五巻。これまでには、「1耶麻地方」「2両沼地方」「3南会津地方」「4会津若松市」と各地域の昔話や伝説などを収録してきたが、最終巻となる今回は会津地方全体のものを掲載。今回も会津文芸クラブ会員の方たちによる、読み聞かせの雰囲気を残した生き生きとした文体となっている。

また構成もこれまでの各巻同様、「伝説」「なるほど話」「こわい話」「おもしろ話」の順となっている。

「伝説」の部からいくつか紹介してみる。「美女峠と高姫伝説」は、会津の平家隠れ里伝説と言ってよい悲恋物語である。「以仁王伝説と火玉峠の戦い」は後白河法皇の三番目の皇子で若くして戦で亡くなったとされる高倉宮以仁王の伝説である。以仁王はほんとうは死んでおらず、会津や越後に落ち延びたのだ…そういう以仁王に纏わる話や地名などが会津地方にはたくさんある残っているのである。「マヤの墓」は哀切極まりない。塩ノ又村の庄屋のひとり娘は村の暮らしにあきあきし「あくびの出そうな毎日」を送っていた。そんな時、庄屋の山から鉱石が見つかり、たくさんの山師が村にやってきた。山師の若者からたくさんのきらびやかな珍しい話を聞かされた娘は、ある日若者とともに村から消えてしまう。何年も経って、顔を頭巾で隠したみすぼらしい女が村はずれの元鉱山小屋に住むようになった…とてもリアルな、マヤという娘の悲話である。（N）

◆ 1364円・Ｂ５判・144頁・**歴史春秋社**・福島・202304刊・ISBN9784867620205

地方小出版 流通センター

ジャンル別 新刊案内

2023年5月1日～31日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

【雑誌】

◆Ｓ－ｓｔｙｌｅ　６　ｖｏｌ．７０２　プレスアート編　280mm×210mm　112頁　５００円　プレスアート　［宮城］　978-4-503-22856-7　23/06

◆Ｓ－ｓｔｙｌｅ　セレクション　特別編集合本新仙台案内　プレスアート編　297mm×232mm　160頁　８１８円　プレスアート　［宮城］　978-4-503-22859-8　23/05

◆ＧＲＥＥＮ　ＲＥＰＯＲＴ　５２１　２０２３年５月号　廣瀬　仁編　Ａ４　191頁　２８００円　地域環境ネット　［埼玉］　978-4-909864-53-6　23/05

◆**かまくら春秋**　Ｎｏ．６３６　２０２３年４月号　伊藤　玄二郎編　Ｂ６　105頁　３２７円　かまくら春秋社　［神奈川］　978-4-7740-0875-2　23/04

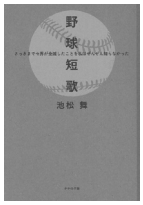
◆**書２１**　Ｎｏ．７８　澤田　博史編　Ａ４　104頁　２０００円　匠出版　［神奈川］　978-4-925212-88-5

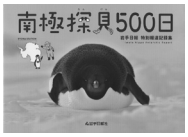
売行良好書

期間：2023年5月15日～6月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『中村哲　思索と行動　「ペシャワール会報」現地活動報告集成「上」１９８３～２００１』2700円・忘羊社　(2)『ランプシェード』3000円・東京子ども図書館　(3)『野球短歌』1600円・ナナロク社　(4)『南極探見５００日』1400円・岩手日報社　(5)『仁義ある戦い』1700円・忘羊社　(6)『絵本のまにまに』1800円・石風社　(7)『特別報道写真集　大谷翔平２０２２　伝説を超えた二刀流』1300円・岩手日報社　(8)『たぷの里』1200円・ナナロク社　(9)『不登校は１日３分の働きかけで９９％解決する』800円・リーブル出版　(10)『日本人が奴隷にならないために』1600円・白馬社　(11)『記者のためのオープンデータ活用ハンドブック』700円・新聞通信調査会　(12)『イチからわかるアイヌ先住権』1000円・かりん舎





［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『イチからわかるアイヌ先住権』1000円・かりん舎　(2)『埼玉の妖怪』2000円・さきたま出版会　(3)『失われたアールヌーヴォー建築』1000円・リーブル出版　(4)『埼玉の戦争遺跡』1600円・まつやま書房　(5)『南極探見５００日』1400円・岩手日報社　(6)『ドキュメンタリーの現在』2000円・石風社　(7)『ジソウのお仕事　データ改訂版』1800円・フェミックス　(8)『文学する中央線沿線』1700円・ぶんしん出版　(9)『北海道いい旅研究室１９』818円・海豹舎　(10)『鹿児島県のカミキリムシ』3800円・南方新社　(11)『新課程 高等学校歴史教科書　歴史総合と沖縄』1500円・編集工房東洋企画　(12)『仁義ある戦い』1700円・忘羊社　(13)『沖縄の身近な植物図鑑』4500円・ボーダーインク　(14)『造船記』3500円・中国書店（集広舎）　(15)『自然農 栽培の手引き』2000円・南方新社　(16)『東松山の地名と歴史　復刻新版』1600円・まつやま書房

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼秦野にあるひとり出版社・夢工房がこの6月末をもって事業を廃止するとの知らせが入りました。代表の片桐務氏には、本誌2020年6月号において【夢工房33年、地域・ひとり出版社の仕舞い方】をご寄稿いただいており、この時には、「夢工房の店仕舞いを考え始めたのはいつか。60代半ばを過ぎて、自らの気力・身体のわずかな変調が聞こえ始めた。古稀を過ぎたいま、終わりの始まりを意識する。夢工房をいつ終えても誰にも迷惑はかからない。2人の子どもたちは出版とは畑違いの道に進んだ。一代限りの地域出版社の覚悟はできていた。しかしである。これまでに200点近い市販本を発刊し在庫がある。この世に送り出した本が読者を待っている。裁断処分をする前に、いまある在庫と読者をつなぐ手立てはないものか。無い知恵を絞っている。」と〈店仕舞い〉に伴う懸案を書いておられました。今回公表された【有限会社夢工房の事業廃止とこれからについてお知らせ】によると「唯一心残りであったのは刊行した本の行方。幸い、老舗〈積善堂〉平井書店に、これまでの夢工房の本と読者との橋渡し役を担ってもらえることになりました。」とのことです。平井書店は1896年創業で小田原駅から徒歩五分という町の本屋さん。地元の老舗書店の尽力によって、余儀なく廃業する地方のひとり出版社刊行書籍の販売が継続されることになった、というのはとてもよい落着の仕方のように思えました。そして当の片桐氏は「感謝の意を込めて、これまで培ってきた紙の本づくりの技を地域の人びとに還元していきたいと考えています。」と、今後とも生涯一編集者として活動を継続されるようです。

なお片桐氏が寄稿された本誌2020年6月号の【夢工房33年、地域・ひとり出版社の仕舞い方】は、当方のHP「情報誌アクセスWeb版バックナンバー」バナーから辿って読むことができます。(https://neil.chips.jp/chihosho/acj/acj202006-web.pdf)

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

honto
ネット通販で地方・小出版流通センター扱い本がご購入いただけます。
honto.jp
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて
電子書籍でも紙の本でもご購入でき、hontoポイントは
ネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットで
ご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。